KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT

後京兄廣物語

1
1034
第13号

元氣精粹

曲亭馬琴著述

一柳齋豐廣画

俊都嶋物語　全十卷

寶玉堂壽梓

明治三十九年壹月二十九日
氏寄贈

門へ 13
號 1,804
卷 1-8

自叙

一年三百六十日問訊應荅千萬言無半人而不言間話俗談江湖事賓主公然不屑吻皆是不無用之辯耶讀書者亦類之經史傳之有益于世或讀焉或不讀焉臻小說野乘則人人啓函壯誦之秉燭不知倦蓋以小家珎說其事奇異其文易會解也王仲任嘗有言曰詼諧謔談甘如飴

蜜有以栽良藥必苦口導之以飴蜜信言
最逆耳諷之以滑稽醫生原来不好糖蜜
説客爲誇寓言之有愛畫龍憎真龍勢不
得已也是故釋氏誑度衆生其徒稱之方
便孫子詭陷城廓兵家称之或略設夫有
塞引邪之路開先迷之門則雖寓言詭辯
不爲亦無益于世鳥之不世鳳凰獸之不
種麒麟人之不祖聖賢事之不常定理物

皆然不足怪予少時好讀小説察於目味
於心曠若發矇曰竊喜之遂摘藻含毫更
裝新研者有年于此矣其書倣釋氏方便
推曰談果間亦雜引孫子武略自稱之勸
懲雖爲世無益於俗見珠然非彼饒舌無
用之辯説長咎短相罵而快之類靜夜坐
蕉窻下新茶一碗美酒一壺幾層藏書攤
于坐右半睡童子果于榻左於是乎引燈

浄書案焚香澄精神而後歴遊乾坤外幻境暗勾引未生君子弦索別世界新奇用傭役烏有先生録了人間一炊榮枯得失作者苦樂亦在其中矣嗚呼談奚容易也喻深以浅喻難以易故文有浅深之彩有易難之差吾才難能之賈豎爲擇二文方所笑小者驩之賢者所辱癡人嘗之以吾不愁有名無實唯懼有口無行素履宿摒不可談悲慟戲藁本亶亶等身悲哉販著述給旦暮費楮毫活家命是吾所以未餘脫俗也何日釋塵以解心累

文化戊辰年仲夏書于自編稗史俊寛島物語卷端

曲亭主人

相傳僧都左遷流黄島以文治三年丙午四月廿三日竟殂于配所其臣有王丸葬之植松其上即盎距今五百七十二載云事在國史可徵也今茲欲天龍法印立石于松之傍需余記之且俾後世不誤古蹟　銘曰

松而墓矣諷古信今人之鄉德疇不傷心

芙蓉介紫石撰

右法勝寺の執行俊寛僧都の墓碑一張。近曾或人所藏の石本を借拓し。京都保年間。天海法印とゝのゝ。硫黄嶋よりれを立。石の高六尺ばかりなりとぞ。その文雅ならざるとゝへども。遺趾をえらび足れを。傳ふる硫黄嶋ハ肥の長崎より。舟行八九里をへいら俊寛の古墳彼処よりあり。當時有王丸ちゝに手ずから土を葬るの日。墓標とし松今る日存なりとゝ。その幹數十圍枝條屈曲し。鬱葉茂もとゝふ。

鏡中毛相類丟深吾
面終難鏡
裏尋明月
中空〻受
月是他空
月本無心

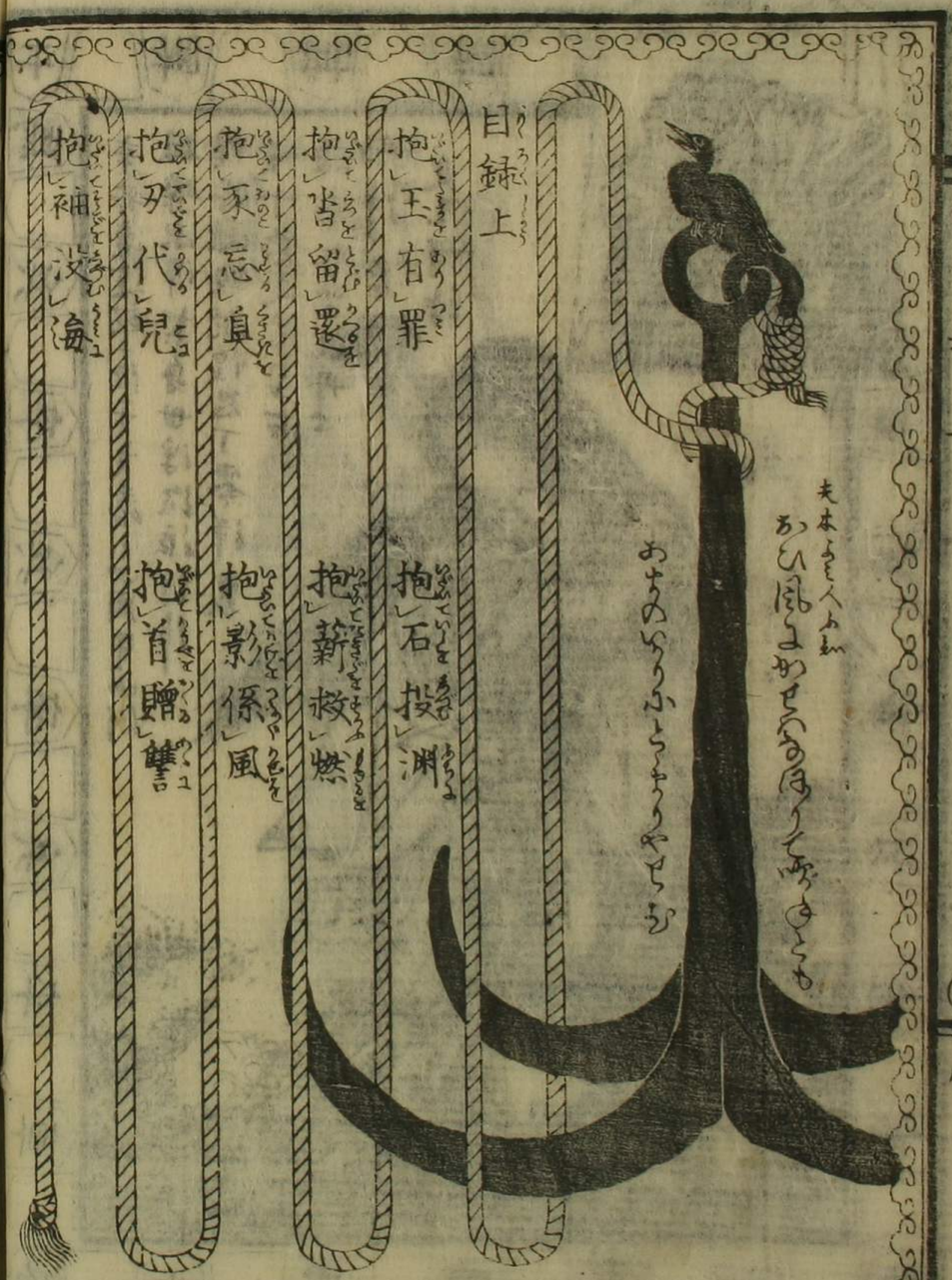
金人完顏時詩

玉笛飄殘月下聲誰
家少婦倚樓聽晚
來更見龍陰處
洛北山前水面青
無名氏句

相撲
力士
行司
俊寛家僮蟻王
瓢零子里客日〻問前途帰
刊家山後才為好丈夫
左潛詩

相撲
力士
行司
門田栗山四郎
朱雀橋邊野草花
烏衣巷口夕陽斜
舊時王謝堂前燕
飛入尋常百姓家
劉禹錫詩

麻呂
龜壽
網裡幸魚
妻酒紡澗
家門外口
流延我回
妖鮮養衣
當又恐於
朝是面天
弟人詩
龜王
辛苦遭逢起一條干戈落し四周是山河
破碎水潭繫身世浮沉浪打萍
惶恐難頭説惶恐丁零洋裏
嘆丁零人生自古
誰無死留取丹心
照汗青
文丞祥詩
蟻王婦
安良子
白河法皇
砲士象將象士砲



夫本ゝ人ゝ
あひ風よかとるほうこそ
あよめらりふとちゃうやとう

目録上

抱王有罪
抱石投淵
抱皆留選
抱薪救燃
抱冢忘真
抱影係風
抱刃代兒
抱首贈讐
抱袖没海

目録下

抱滕長歎
抱株索花
抱苔露宿
抱脚擒猾
抱琴述情
抱雪向日
抱書温故

目録終　全本八冊

千山多孤孤者行人
路滅孤舟衰草翁
猶知宰仁事
柳ふかえ見事詰
芦ゑ出

俊寛僧都嶋物語引用書目姓氏古跡出證　凡十五部

○長門本平家物語　源平盛衰記　東鑑
玉海　千載集　寶物集
保暦間記　義経記　参考古事記
拾玉抄　訓閲集　山州名跡志
應仁記　義経虎之巻（明暦丁酉慶安序）　謡曲画志
○俊寛ゞ流謫（長門平家）　黒江三郎（同上）　足利明神（同上）　松前鶴（同上）　盛衰記
鬼一法眼（義経記）　白川湛海（同上）　鎌田三郎正親（同上）
大悲山の隠宅（盛衰記○長門本は鞍馬の奥殺生とあり筆者の思ひよるべし）　俊寛所領十八箇荘（長門平家）
法勝寺の塔は天竺の無熱池震旦の昆明池我　朝の難波の浦
小うつしとゆうの記（平記）　鬼界硫黄嶋圖（中山傳信録）　松蔭硯の圖（山州名跡志）
この紀枝峯より遥めるを要を摘てこれを録す。　書目出證完

俊寛僧都嶋物語巻之一

東都　曲亭馬琴編次

第一套　抱玉有罪ゝ　黒居亀王ゞ事

祇園精舎の鐘の声。諸行无常の響あり。沙羅雙樹の花の色。盛者必衰の理を顕す。奢る人も久しからず。春の夜の夢の如し。猛き人も終に滅びぬ。風の前の塵に同じ。尊き卑きくらべ来る。誰か終の友とならざる。されど不義をして富む人も深き雲の危きを恐らず。人を害して快楽を淫酒の機とする。貪婪の火坑に陥るを忘れて。驕奢の焔に且焼むかの隣りなる家の貨を羨む。燈に寄る虫の如く。猿馬を不及の愿に思ひ。五慾の海底に沈むことなからんや。彼も人。この迷ひ。ひろ
るべし。和漢の傳来る中に。清盛入道が一期の栄花。俊寛僧都が孤嶋

寛苦傳て後よ中くだりて公頌よ及びれ孫抑を改大臣平清盛入道と
さたる才徳の人よあら祇ど白河帝の落胤なり。保元平治の擾乱よ死灰
の朝敵を討滅してより。朝恩祖先よ倍て官位人臣の上分極めて孫
厳上の仙籍を踏む。一天の安危その身よ由て万機の理乱皆よあて。
善も悪も浮世のまをあらるよ任ちぐとらふ上人へられをも因ざりくやふ
徒よ。戎い侮媚。戎い誹謗。あらと不思議のまも出来よあり。と嗟くものも多
かりけれども時と勢ひの強よ及びがたを首て。改を学ぶるまつるよ。
新亞相成親卿豫て近衛の大将よ至をかけ。種くの祈禱をんどをりけ
るが。結句をのひあ〜ぐ。曩よ清盛のまを息重盛宗盛相並て左右の
大将なり。その後治兼元年の春。清盛入道ふ上やありをん。重盛卿よ
大内を辞しまをり。徳大寺の實定卿を左大将よあらしむ。成親卿
鬱憤ぢるまを〜〜。只管よ平家をうち滅し。四来の所存を果さむとぞひ
定めて。竊よ後白河院の御所よ参りさまざまようらくをうち祈よ院よも。
豫て清盛の侵放すと。舊主先皇の政よも随ど。而官四民の歎をも顧ず。
君をも蔑ろにまるをうをけらる慢くもはちらべ。成親卿よ同意の侍
気をまと。唯うら忘れて祇よ成親卿いとく〜隠謀の
決して。ひり〜便宜の黨を招集るよ。法勝寺の執行権少僧都俊寛
平判官康頼。近江中将入道蓮阿。藤田源蔵人行綱。左衛門尉師光入
道西光。この外北面の下臈數一味同意ぢり。その中よ。法勝寺の俊寛
僧都い。年来成親卿よ師檀の契あり。とて。浮世のまよあづらよ身をも
あらじ。瑜伽成就の行者ぢて。一念稀数の志を特し。三塗悪趣の魔隊
よ入りぬるまを。以ぬるを。彼僧都の俗姓をとづれば。人皇六十一代の聖主

村上院第七の皇子。二品中務親王具平。六代の後胤。仁和寺の法印寛雅が子なり。京極の源亜相雅俊卿の孫なり。この雅俊卿ハ。弓とる家にあらねども。ひさまいと猛き人にて。常に肘を張り歯を切りつゝ。うちくらしたるをもすりしかバ。皆怖とすくみおぢしといひて。京極の家の前をバ。人も輙通らざりけり。かゝる人の孫なればにや。俊寛もその志法師に似ず。平家政を執りて。沓と冠と処を異にせる世のならひを傷痛くおもひ。倘朝廷のれ大事に及ぶこともあらバ。愚僧もすハ。奈良法師。山の大衆が物具然小菩るべし。郎方の楯ともなり。堀の埋艸ともなりて。國恩に報ひまうべしとて。常にひそかなる友にかたらひ。暗ひかゝるとかや。件の法勝寺ハ。洛東大将軍の森の北白河の西にあり。白河院の御宇。義暦元年十二月十八日。堂舎落成し。座主良真慶の導師にて。建立供養の日。帝行幸ましましぬ。又。かの永保二年十月朔日。法勝寺九層の塔成就せり。此塔ハ。八角九重にて。横竪七十八丈四尺。奇麗荘観美をつくし。善を盡し。重くに九會の曼荼羅を安置せらる。三國無双の鴈塔なり。ちかく造り出せしかバ。天竺の雲熱池。震旦の昆明池。我朝の難波の浦に。その影うつりて見えたり。らどそのち。急徳二年八月。白河院の后。郁芳門院。當寺に常行堂を御建立ありし。仁和寺の入道の宮をもつて。供養の導師とす。ゆゑ。亦鳥羽院の御宇。康和五年七月十二日。當寺に金書の大藏経を慶讃せられしも。古法勅願の梵城。貴賤渇仰の霊場なり。當初仁和寺の性信勅撰に至ども。この寺の寺務に近う。今の執行俊寛僧都に至るまで。その法流肉食妻帯く。就中俊寛がごれ法門よりも繁昌して。十八箇処の庄園を以し。京極に宿処を搆。鹿谷に山荘を開ん。妻子富貴に処て。眷属衣食に飽ん。その形勢。槐門清

按ずるに扶桑略記年記并元亨釈書皇年代記略年統王代記等先の院の康永元年三月廿日法勝寺焼亡云々 […] の塔焼失すと合運図に載 […] 記に堂ハ八間四面南面に池殿 […] 名迹志巻の四法勝寺の條下に云當寺ハ慈仁 […] 今ある […] の […] 遺漏を補ふのみ […]

花の貴族よ苏〜と。是より先保元のころかよ。俊寛僧都。妻を撰ぶ。いとゝ意よ稱ふりのすぐれつるよ。成親卿の上童よ。松の前とぞ。舊國さる處女ありけり。桃源春ふかくして。その紫嘗流水よ伴ひぬべき情の色外よ見いれ。ころの雅内よ傳うるしぬ。俊寛られよ眼とぶかりて。常よ行かひつ。やるかもなれ風情ありを成親卿気色よ精〜て。意の中よ入れ〜すぐ。ぞその人よいかうあらて。徒よ過ぐ。その頃清盛入道宰大貳なりけるが。ころの祝よ。松の前よ慈想して。人をして。艶書なども贈ることなれど。稲舟のいなとのと回答て。誘よ水草のなびくよとぶめど。巻らぬ〜るまよ返〜遣〜ければ。清盛いかゝらひを焦。を苦むる折ふし。平治の逆乱起て。信頼義朝ありけれど。清盛さきぐよこゝらて。罪科の制成親卿も。信頼の方人なりけれど。清盛さきぐよこゝらて。罪科の制度よ及ぶ。却成親卿ゝ続く昇進し。位は正二位。官は亞相。ぬ。清盛いかく成親卿よ恩を被ぶ。明白よ松の前を戀望するよ。彼卿。ゝの外よ入れを聽さぬ。平家飽まぐ朝恩よ浴し。官位俸祿世の耳目を驚ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。家の女房を賣て。媚をその人よ求ひぬ。松の前とい。豫て俊寛僧都よ。ぶ。ぶ。ぶ。意よ入れを許し。且清盛ゝ。妻あり。富貴の家といへども。彼て歸ぶ。ぶ。ぶ。婢妾あり。俊寛入道圖の輩なれども。ぶ。ぶ。妻するぶ。ぶ。正室ぶ。加之傍都ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。の俗姓村上源氏の嫡流ぶて。皇ぶを出て遠ぶ。常言ぶ寧雖ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。牛の後よ。ぶ。ぶ。妻ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。

成経にあわれがるべきことを聴き。者奴卒治逆乱の時は越の中なる事なれば既に死刑に定められしを。首を続ぐべきなれども。者奴が父家成は中納言なれば果ては官位は親よりも超。大國あまた賜ること。時めく維盛卿にもおとらぬ。松の前ぐらい。殿上人上達部うんどに棄てられぬ。俊寛は法師なり。是彼世をも人をも単らざること妻なれば。その後あまたの妻にもおとらぬ。するものなれば。あられぬ事親俊寛ホガうへに。越度あれば。とく。たびたびが行末の罵も止ぬ。竊にその隙を窺ひつ。いかで便宜を給はばしと。空しく年月を過しける。今度成親卿の大なる恥を見たりんを。実定卿をなまあらんちん成親卿に物をいはせく。已前の恨を復んとて。笑あらんとて。驕兩の外にのこ降てて。養を賣るのられを恨めば。復お家に熱びあり。されば清盛の怒は俊寛の喜びとなり。僧都は成親卿の情ある志を感激し。この卿のなるべ命もはう惜まるべきとて。涙を傾く交参ほどに。今度の隠謀一端なれども。第一番に拷問ちんの故に。僧都はあるべきのごく。情を運び。想をおこし。ぞうすとなるべき妻にあれば。妹夫の契常に過ぐ。松の前の腹にまたふたりを産しぬ。あはれ女児にて。鶴の前と名づけしが十四才次は男児にて。徳壽丸と呼べり。七才にあり。亦家嫡に。亀王蟻王とは兄弟の童あり。この母は越前國水江の庄の住人黒屋三郎がまたこの件の水江は法務寺の所領なるにより。僧都ぐらい彼地にあれて。木圖黒屋がまたこの件をえて。ようの童さ。これにはなさとて。叶嘱に所を与へ。ようの黒屋三郎。泰と言受して。ぞうのまたこの件を進らせ。伝はれを都にあるべく。童にて名使ひつ。とをこのようにこそ

典家の前象
葉庭前の
荒よ巣

の慈愛なるがごとくなるに異なるべき。亀王蟻王の恩を感じ義をかりひ。
ひと信ずるに奉るべし。その志も芳しきに勝らざる忠信を二の壮佼なるべきあり
るべし。かくて治承元年の春。亀王廿二歳蟻王廿歳になりぬ。この同胞器
量骨柄逞しく。膂力人に勝れたり。天晴物の用に
なるべくいええられど。法師の所従に勇士いかげる。その亀王い僧に
て法務寺の一の預ともなるべきやと主の俊寛僧都もこれを亀王
をぶるに日童にて召使ひ才の蟻王をいたえ服さし。松の前媒にて妻良
子といふ女の童を妻にとりこの妻良子が親い門田の案山四郎と呼れたるに
賤しからぬれども彼が挙動信くしく。他に勝れたる操ある女子なれいとて
僧都夫婦駆の侍児の中より擇出して。蟻王が妻に賜りたるぞ。さる程に
今茲四月の上旬より成親卿。俄頃に思ひ企てあるにより。俊寛もこの

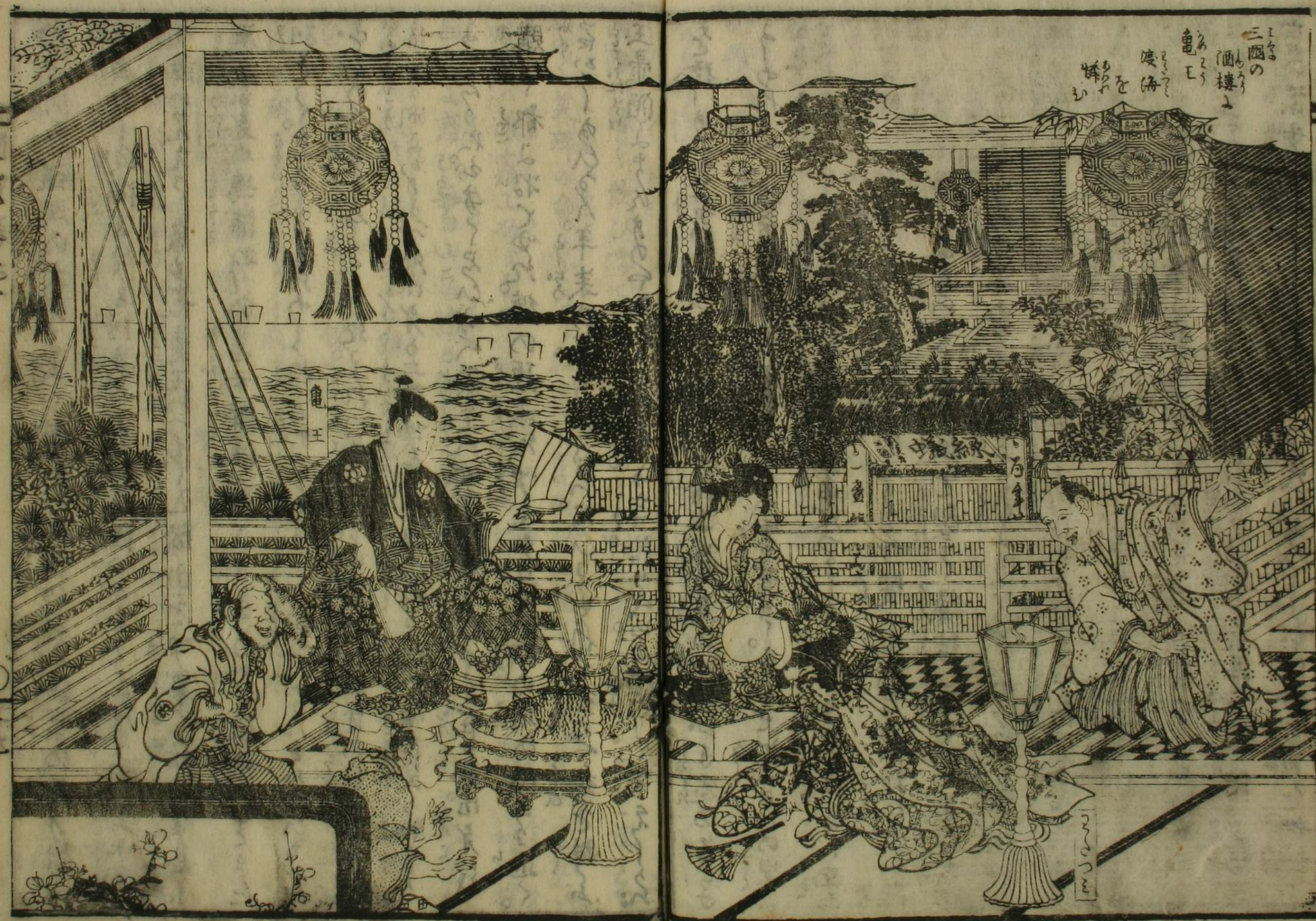
隠謀に与し。密にその輩を鹿谷なる山荘に集合せしめ相結び。ふるふる
須僧都が家の逆樹に蔓巣を造りのごとく。是未曾有の珍事なれぞ。
人怪しとぞいふ。夫蔓幕に巣くるは。危ふきに譬へる。季札が金言。
況て樹の枝に寄るをや。是喪亡の象なり。と時の博士い嗟けども俊寛
いかれを耳もかけど。いよいよ平氏を滅ぼすべし。謀もぐるとて。肝膽を推つ。
ぶくとぞ。これ幼稚なり。叡門に入りて武士の道に疎いなれど。九合戦のの
ひ兵粮と軍用金と。彼第一に。はかるべ。ちくしのその准備をとりもどいうのべ
りぶくと。一業。有一日亀王を呼び。ひそかに。いふ。これ念願あれば。洛中なる貪人を食
よ。能彩とぞいふ。ぶくと十八ヶ処の庄園を催促し。万倉の貢米と。三
千両の要金を課せり。速に積上げよ。尚逆らば。紙度くるべ。ぬいつと
ぬて。慶足せりとて。頻にこれを急ぎ。亀王いその意を知ぶ。いと不審な

ろひのぐ〜。縁故を内定めんも。礼の所存なるべしとけゆりつつ。と意果て
猛き行装を整徒朝五三人の従者をわく〜京極の宿所を起ち。近国の
所領を残らず〜うち廻りて。村長ホに領主の命を伝へつ。也ぬくと越お
ある。水江の里に到りねとゐ此の亀王が故郷なるよ毋とを従ふ世を逝られ又
黒屋と京ハの所健さく〜家よあり。母度亀王が主の使をうけゆりて。
なるよ。豫て風声ありしうべ。黒屋ハふう〜結びて。五七日家よ留めさるゆ〜ホ
歎ゆつ。年来僧俗の庶ゆ元るを伺く。感涙を押りゆ。世よゆ元母都
よある蟻王がるゆどを。親子送ゆ出く。或ハ悲を。或ハ喜びぞ物語よ。
とを元日数を惜めども。ゆ〜てあるべ元よ〜ゆ元べ。亀王ハ父よ辞ゆられ。
なるべ越路ある。三国の港も法勝寺の所領なれば。遠よ彼処よ到て。謀
殺の要金を催促ゆ。有一夕。村長ホ勝ゆ是。港よ近ち酒楼よ登

とて。二遍三遍盃も傾ゆて。豫て准備ゆ所ゆりけんと。艶なる白拍子の乳
紀ハ十八九なる。こゆ元めるが。特衣よ烏帽子ゆ。伊豫簾の蔭ゆ立出ぬ。
亀王よ對く。恥ゆ俯ゆ沈を低ゆり。立寄ゆとゆれば。立もやゆ〜ぞ。ゆとゆ元て
轉輾ゆど。亀王ハさゆく〜。村長ホハ苦ゆ〜元ゆりゆ〜ゆ元ゆ。その所を問よ。ゆよハ
なる事回答ゆえちゆ。畏難ゆる袖の雨よ衣服のもとの夜の真ちさゆ。と
従ゆりゆれば。亀王忽ち声をふり立ゆられゆども。領主のゆん使を
偽ゆる忌ゆ元ゆ。ゆを行ゆ。汝ホ元ゆ腹ゆ。ゆて。竊よ與を催ゆとゆ。
ゆゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。

酒宴の興を添ずとぞ。ひらぶ醒と醉ところよ。面ちれあひりん。ふたつく
怨いそ行り。厳い水江なる。黒居ねの家子。亀王丸ふくおいさぶやう。
つのそ。ひるの御よ生育しる。馬俯去帝二ぶ女児渡海よ行り。又を帝二ぶ
ふ水進ふとと。葬ふるとべさく。教ふ和ふせいふくいぶ七ッ八ッのおろ。
厳い物りて十のうへを。ッ二ッとりの妻ふりろよ厳いりく祝ふく。
外主ふ戸れと洛よ上り。絶ふく久ふくふりのよ。名告るも面ふく侍
ふども。傳ふいふく五年ふ前。二親ふぐら頻ひて長ふ病着よ貯緑毒
茶の價ふとの身を換ふく。ふふ城路の三國ふる。河内よ一節足ら
ぬ。糸汀ふ人を慰め。ふよあふぬ朗流ふと。嬬ふ月ぬい早秋や。蒙ふく駒
の催馬樂ふ。翁を扇も親骨の。為ふふりへどとのうひふ。父母ふく
ふり行ふりぶ。長ふ嘆ふい心。百日ふく。濱の真秋の忘貝。ふふと年

を経ふのを。君いふふ。故郷の城路ふ。ふる鳥の跡。又かふ迹の弟子
ふのれど。人の往ふい水茎のやくやふ。身い零落ふ。ふふど做ふふの果ふ。
夏毛秋毛とふる筆の。強頬命ふ毛。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。
いふる恥ふふふ。昔ふのぶの敗井筒。ふふふ髪のそのふふ机のふへの雛
ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。
ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。
ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。
ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。
ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。
ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。
ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。
ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。
ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。
ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。ふふふ。


三國の酒樓
龜王
波海を
蜂い
龜王

いとゞ流るゝ蝋燭の火光よりも面影わ。雨夜の月より海棠の花のよ
り異なるゝ。偖よりる村長ホも。ぴよ理やとぞうよ。養ゝ押ふ水涙
も。詠いえく哀まく。亀王わつゝと。縁由を申果て。数回嘆息し。
原来ハ牙ハ。鳴浦れの息女。渡海どのゝくありける欲雑紀とさに
列をく。忘るゝとゝあゝれど。あゝるれまく。面あんとんとひもろ
ど。その人とも。ゝぞりたゝれい。参とよ。ひし。師牙の契あるのを
事なる。閑よりよべれ。ハ牙が二親世を逝ぬひるゝ。須臾父が物ゝう
よそゝりれ。ゝ者くゝひあへ。領主ハ。世よ情ある人ゝく在ゝば。ハ牙を
購ゝく都よねとゆれ。絆の頭来ゝ。ゆえめげなば。松の前のほゝう逝く。
名あゝゝめひゝん。年来の憂ゝ。ひゝるゝ。ゝひゝれて。死ぬ。毒を嚙ふ
玉帚。酒よりんゝのやある。とゝひ慰ゝ言語ゝくと憑ゝゝゝゝ。

渡海ハ深く歎び。涙て盃を飲る。村長ホも。忽ち以奥を流し
おのく笑坪の會ぞゝりぬ。くくて夏の夜の短く。やゝく深ゝ。
亀王ハ旅宿よ。ゝ。その夜ハ其外よ明ゝ。ゝ。ゝて渡海が情よ接
ゝ。毎日よ。ゝ楼よ登ゝく。酒ゝり。ゝび暮を。ゝ。都へ。ゝ
ゝ忘ゝ。彼女子を購ゝく。是彼の妻奥。主の要金二三百両を
ゝ。ゝ。亀王ハ義の社侠ゝとゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝを。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ

造らし。成親卿以下の徒。よろこび被知る集会く。平家を滅さんと行
果べきなどしるる。ようて後世その処を。鹿谷と稱ん。古蹟今の康
谷村ようの。近江のうえ一里あまりの山路を隔て。岩尾山の上にあり。こをも
いふべしへい。鹿谷と呼ぶるべし。あれ山中うれども。耳ハ壁に著。岩も物いふ
とありとのべば。ひとり人ありて。怪しみ山をうやうやしく。その疑を遂んを為に。俊寛僧
都ハ。おのが妻子のこれ捨て。山荘の新宅に赴き。終日遊びうたひこの日も
あり。頃ハ治承元年四月廿一日。僧都ハ。山荘の若禁ぜ。鳴杜鵑
も吟ずれば。夫人案の前と。ふたりの愛子。鶴の前。徳壽丸を伴ひ
有王安良子ホをゆく。もくべたらん。陳ず蛾王に仰しぶ。蛾王うけ
ようく。廿一日の朝まだ元。毛氈幔幕うんど。ようべの調度を長擔
ふ唯彼し。こを奴隷に担擔し。主に先ようく。山荘へ遣しよう。時に

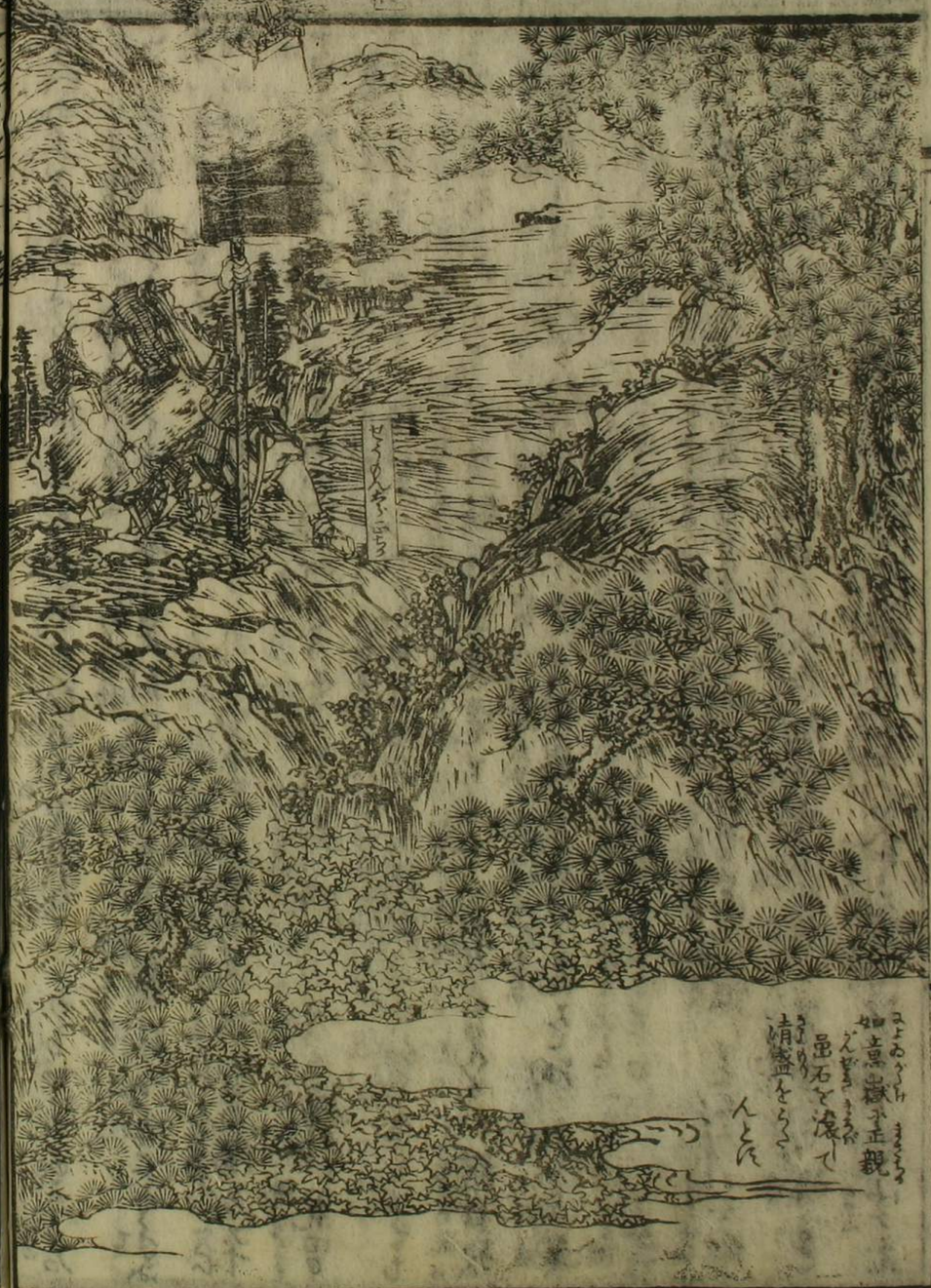
もめれ。廿日平相國清盛入道。如意の麓見めぐしよく。備前國の住人難
波二郎。経遠備中國の住人妹尾太郎兼康ホ。鞍の武士前駆後従ら。
如意山の麓。麓谷を投くれりもれよう。俊寛主従ら。嘗こをたべ。彼
長櫃を担擔する奴隷どもふすど比及ら。岩尾山のうるる。如意の麓壷の
ほうよ。彼櫃を舁ようし。麓を掬びて飲もあり。ひらたる石に
尻をかけて。草鞋の紐を結び。ある者ども。浩処に素袍の袖を
結びあげて。袴の稜高くよう。六波羅様の太刀烏帽子ふる武士。
五七人ようて。只今憩ひる。俊寛が奴隷ホを。佳とあらまく。這奴何
ものぞ礼する。今日ハ平相國の麓見に出ひて。車の程遠
ひくべおかまくよ。こハ嗚呼。ようと漫ようて。退ぞと罵ようく。持ようて
鞭を食ようし。排退んとようべ。奴隷ホハ大に驚き怕て惑ひて再び

長擔を扛擔して及ばず。右往左往して逃去りぬ。話分両頭。こゝに中古
いねる平治二年正月三日。長田忠宗に対面の人。左馬頭義朝の孺君
鞍ありける中に。牛若丸と申す児。常盤腹の季子なり。義朝討れ
給ひしとき。当才にて在せしが。朝敵の子なれば。同胞今若乙若牛若三人
くも。ふうゝ縲絏に繫ぎ。既に切らるべきに。母の常盤ぶ操を破り
て。操に稱に慈愛に。辛苦を助らん。四条のほとり山科なる老法師
に。ゆゑ〳〵を。七歳にして。鞍馬の別當東光坊の阿闍梨の弟子となりて。
根山に入給ひしとき。学の窓に螢雪の才を磨き。手ならひ読書に
心。夜ゝ鞍馬の奥なる。木船の神社に参詣し。神に祈くおのづから。
武藝の奥妙を究めぬ。時に青年十六才。天性將帥の器備りて。その
志一室を掃ふ。孤に平家をうち滅さん。父祖の仇を報ひ。天下を

掃ひ清めんとぞ思ひ入ける。近曾鞍馬を竊出て。都を北山
中に立ぬ。便宜の業にあらず。それをおろく奥州へ下り。秀衡を憑
て。義兵を起さばやとぞ思ひ。この二三日は如意嶽にうち登り。夜は
樹の蔭岩の扶間に休ひ。昼は終日洛中を直下して。平氏を一時に攻落
さん。軍慮に餘念なしとぞ。左を息て宮ゝ。果枯得失の理は人の世の
常なり。平家は天の与を知らず。草木も靡ぬべきぞ。あれ西方寺
山の間より。車を轔ら。前驅後従のいつめしたる冊まで。麓谷の如く
登り来るものは。當に是清盛なるべし。さて許多〳〵従卒なる。塗ゝ
蟻に彷彿たる。南柯の冨貴面あらん。彼入道が驕奢は院の御幸に
なれ揚れ。それくらべもに鈞の。仇人に環會なり。外に車を轉
さて音にけつ〳〵。今。紳に向ひ弓矢神にも捨られ。

高峯の名さく如意宝珠宝の山よ入りぐ〜よを空ぜるうを朽をれ。
とひとり言て伸上アてうれまもあ〜ぐ差ず拭り。瞬もせぐ立在めへばひも
かげぬ後方うう。誰とうちうぐ猿臂を伸〜て。襟をそうと抓飛こう
膽ちれ女年りる。彼六波羅うり毎日よ出る。三百人の子頭をち〜ずく
今の世よ平相國をあ〜さうよいかのい。忽ち視目嗔鼻が告術〜て歯
を鍛舌を抜りのをか〜ても命い惜り〜ぬ欲。さ〜ぐ世を拾あげうれ車
のほとうく〜ゆ紀。賞銭ありてん。とりもあへど。矢庭よ引へさんと
する紙。牛若く〜ゆ〜を反りて。拝ひ退騒ぐうるうまもあくえうえう
めへいその人年齢い三十許り〜て。眼圓よ頬骨高〜。身丈い六尺
あるりもあるらんとうえうう。洗衣の裙短ぐよ白榜の甲拭脚羊〜と
洗除の既ゆを被り。左うよ斧を突立う。痩鬼の荒ぐるぐ。ゆら

ようあるく立るが。倘アぐくやぐひうん。左右るくいおもやらど。牛若
これを窺しく。冷咲う宮よゆう。足引の山児ゆうい。雛猿ゆどそまふ
附め。汝不が分際ゆく。摘ちうう九ゆあうど。ぬ壁の水の月。闇ろ平
宇ゆよ怨めうと。〜さまふのへば何ちうるゆ。奇怪〜。と叱ゆめくば荒男
い大よ怒ゆ。大眉ゆ鉄ねゆ。ゆるめぐる面彩ゆい仰げるく。さゆも
ほざれまるゆ。迅曽鞍馬を逐電ち〜。牛若九とえうい絆目欲。
名告れく。とられたつ。晃く斧を振揚う。命る荒を泡ぐ。真
額を偏ぐ。ぐんとゆるを。牛若のゆうのゆうゆ。小ゆ刀ゆ振て受
ゆ〜。衝とつけ入りて荒男が斧を比上よ打落〜。怯むところを仰
さうよ突倒〜て。起ば突んと刀尖を胸のめうへう着めど。憾を
さうゆ。捷アめふゆ御曹司。全く命を惜みめうど。ゆえ


品石を浪て
清盛をらく

なるべしとのたまへ。たびたび御まをとぶめ。とうとと云詰も故めうげまで
卒人なれば面魂を。半右熟に詰しじ。やうやうめとりぼちらんがをう
引起して刀をかしめ。衢の秋塵より言うりうれを半若とうりて彩のつ
いとく意をはげし。仔細より告れと宜へば。荒男は頭巾を脱で後方より居
くりう。頭を低くさうんせう。君のいちごちしめさるべし。僕はりん父
左典廐義朝卿臣とうりより湯忠宗より強れる。蒲田二郎正清がより
證門を郎正親とさうんのく。君父の仇を殺んれより。惜くれ身を存命。
年来この山の東なる。江刑志賀の里より此を偽び。樵夫とうりて戸波羅
のな侍を窺へども。落魄なる孤独の身はそい威勢宇宙を蓋み清
盛より。逃るべし方仮なり。春の花。秋の本の紫の紅も盛久べし卒氣のを
とりんがいぐ朽をしく。精を瞻るくいるべ月日を過しゆひ。ちうう

御曹司は鞍馬なる東光坊より在をるうを聞くゆ霧出しまりて大お
軍と仰せ傳へ。義兵を起さるべゆとうふ程より。四の鞍馬より起を外なが
ら御客止を。思ふそいへども。なほ稚く在んより。夏知べきうれのをうん。
とうしひへて五つう。只成長のみを。行もうぶれば一月もより秋より異なう
れ孤忠を天の懐をてや。既より二八の春過るなるうれ面新をこそ
しとびんまるを。敬びられより倍りのなり。さればなほその強弱を試をまうん
乃より物仲なりとうひなるべ。旬恥ひべより果べ。僕がうりより達を鳳凰
そ卵の中うう。その声衆鳥より勝を。神檀は二葉うう。その香。餘木より
優るとうう。打物とうとうれ先祖は幡磨より。芳をあうを天のなをるん
大将その器をより見を。末しのみべくいと。只官より稱嘆べて感候をめ
めへざうける。牛若九は。縁由を伺て故びより退めうを。原来洲は正清が

児玉太郎正親と名よる。これ鞍馬山より生出て、西と東をたづり。暑く寒くをかぼゆる比より。平族をうち滅して父祖の孝艱を備と風疾の方すを苦しめ。母の仰に隨て。出家人となることを欲ども。こゝを以。近属の山を脱出て。室に秀衡が名を尋ねるを記さん と思へども。単身にして陸奥まちぶ。その怪忽を疑ひて。義朝が子とは かりんず。便宜の人をかくしひて。倶にてまちぶ。深念して。都に近 高峯よりけ入り。ものゝひとを見ず。洲に環會を是併。源家氏の氏神。正八幡の加護あるべしとて。鷲谷のあたを 投て登る。清盛が道ゆき風流のめざましさ。大丈夫たるものは雖 もかくこそあるべけれ。いとゞ父義朝十五个國を管領して。内の昇 殿を許されて。官職武畧い祖先よりも勝れたれど前世の業報脱

ぬ。ぐさうけん。思ひ出れば平治のむかし。待賢門の夜戦敗北日本い鈍 に清盛が絳先より刺とられ。都を落て東路に近江を過て。あを ひ。長田が家の浴室に正月の雪と消ぬ。勝も負も合戦の常 なれども武士の栄枯は槿の花ともいふ。世に喞 言ふ慷慨の涙を忍びてもくぐ正親も小膝をくゞめ直ひるいめも くるゝ。籠のほとりへひとり。清盛の車を指し。出貧に御曹司君 奥州へ下向ちしくて。秀衡をかくくへ軍兵を備へんと宣ること。 その理あたよあらねど。眼前仇人を直ちに殺たくこの儘よりは這 奴石を持てうつて。ち殺さんといと易し。只正親よりも任せ。ゆりと まもしものくを左右の袖を掲げて。傍乃巌よりをかくしを牛若志 よ押ちぬ。をれ正親血気の勇より捷ることを賈誼が策よも嵐より

車を
摩して
平相國
西親の
石を
吸る
清盛の車

投ずる器を忌とのゝぢや。事に臨て懼を懼を謀を好むこそ真の勇士なるべけれ。危し〳〵と禁めゝば。正親莞爾とうち笑ひ。此從ども。天の与るを取らざれゝ却禍を受とぞいふなる。倘為損ぜば正親が命を捨て禦死戰ひ輙く落ちゝとべし。義を立て死されば勇名ぞ。たゞ〳〵とぞや。と回答つゝ。ひとぎまる気色なれば。牛若再び宮ぞ。忠ありとなれど。鞭を揚。山を拔項羽が膂力めぐりを敵十丈の谷を隔て。ひらぐ彼を發と飛ばん。蟷螂が斧を振て徒に鉄車に向ふ。車轍の鮒の泥に吻死。可惜命を失ふ。あはれ後世でも笑はれるんと仰も果ねば正親は右の拳を握て固く。件の巖を礎と打ば。巖角岸破と砕ぬ。そのとき正親は。常をうち拂ひ。高〳〵からゝ御曹司。清盛が法師首をも。此ちんこと

よ裏よめり。長食後の時を待し。その圖を外さぬ怖ともなぐ。許し〳〵ぬへといそぐ牛若ほと〳〵感じ。ひその勇力をえ〳〵ぬちわうとく。と宮ふのぞ正親いつと身波起し〳〵。巖をもつとり抱死曳と声〳〵起し。目上よさ〳〵揚く。圓ひ回るゝ引の巖ひ。めろげるれどもいと重死ぬ。小答る健男ひ。搏〳〵ぎ死忠ぶ。さる花よ難波妹尾が徒從者數百人陸続し〳〵。前よ立後よ隨ひ清盛の車。既よ如意山の裾よ。ゐれ。牛若られをれ說〳〵。そ今ゝと宜へば幼ゐ。さふと正親が投ずる巖々撞と響死。牛も車も打居らられ牛飼舍人ひ轅のやよ。布れて忽氣息絶さりぬれども清盛ひ己を圓ふ。のゝりやすると豫てその用意して。ゐる拵山よひその身副車よ乘て。遥後方よりわりつ打砕られる車の内ゐひ。ゐ日も主ひ在〳〵ざりゐる。ゐ匿ゐが難波妹尾ホ。吐嗟と猛よ驚死ぬち

山の頂を信と向上る。あれ辯者そ。脫そうと散動つ。まみ〳〵弦を川堤
右刀戎抜挿沢木の根藤蔓よとりつたく。八方より攀登る牛若
主従戎稲麻竹葦よとり巻とり。当下正親ハ曹司よりうん雷。敵
兵山をとり巻とれば。僕この処よ踏とどまりて。老力のものくくとけそ。
防ぎ戦ひいんよとく落ぬへとすくめちうとそ牛若改をうち掉て後縦
万夫不當の勇ありとも。彼ら勢をめけ　ちん。伊ひとり死とれ。とてうぐ
身必活るあもあらじとそ〳〵べ主従力を戰〳〵。ちの移よ戦ひてうろとも。
この山路の露と消んとそ。ろ〳〵後ゆとらめと。宣ひて一足も退ぬあい
ど。正親ホもくくにぞ。これハ淀ともおぼえいらじ。忠臣その君よ代りて死
するとと和漢よ弦ら〳〵〳〵べ。正親をいとをくてこ小命を賈！ありよ
ともその益徒くゆらどとく〳〵落延ぬ。とりふ声厲した山下風の木

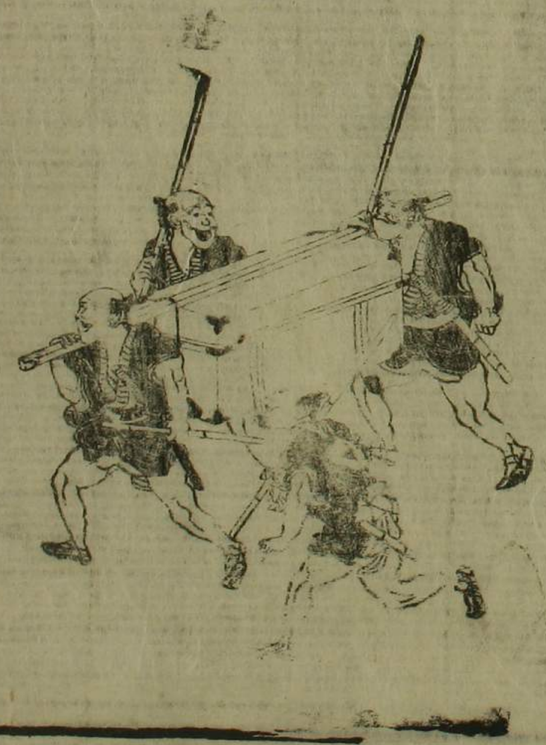
の葉よ似る雜色如木ホ。左右ろう競ひく迫い正親ハ些とも騒ぐ。
山刀をく振く。手勢が中よ割く入り。縦横ま昼よ薙仆ち瞬
間よ十人あまり。血よ塗れてぞ臥くその隙よ牛若ハ茂林の中ま迫
ま入り。腹を切らんとあぼもーぐ。敵一騎をも殺ようあどこ。ろて死んハ女ち
しにあ汚ろう正親が志も無止ぐ。ざられば。脫る紅ハ脫ぬ。えぐや。と呂ひ
へ〳〵と敵よ見著られざる伐。僥倖よ。麓のり三へ走りのハ。正親ハ牛若を
後ぜむく落〳〵まくんと呂ひ〳〵ぐ。ぐ勇を奮て戦ふ程よ亦五六人砍刈た
このされば平家の後年太勢ろへとぐぶ。勇士の降よ砍ぐ。ぐれ。辟易て
ぐえとる折ぐ。難波二郎経遠。後馳よ走りまつ。衡と正親よ引延ば
上をわへと摟合ぐ。互よ咀を踏外し。滾くと。隨逸ある。髑髏へ踏
ともよ隔ぐ。正親終よ経遠が沢咎を飛く。浮ぐ。尖た歯牙よ押

當つ。首振動て婚出るをあげもゝそゞ妹尾兼康弦をとて走る蒐。
正親が鳩尾骨割く。背へぐさと突徹を正親い矢処を刺通て。今うわつ
とゝひゝりが。持る首を撲地と投著。刺れすぐゝよ柄をちぎれるく。よえ
近くこゝの私よ。妹尾もたゝこゝりのあれが。弦を捨て正親を突倒し。聽
く首とでとゝりける。或いふ。難波二年登遠り。清盛入道布引の瀑布見の折ゝ。巖壺ゝ
いそぎ行れり是帰りめりて。北仏よ雷ゝ震ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

如意の能登
三勇士
頂き
らーころ丸
せの尾太郎

せうのすけ

著うもぶともおうのんうとく。偏に命運を天に任し。ころろに八幡大菩薩
念じつゝ。慌しく櫃を開き。躰を容べたほどに。内なる調度を引出て。
夏艸の中に投捨ぬを〳〵跳入て。内うち蓋を舊のごとくして。音も
せずぞ〳〵ありける。あ〳〵ともたゝるゝど俊寛が奴隷どもい。先立の武士ホま
追れて。山のふもとの龍の裏なる。怪松の下に潜居て。あくまも往返
ぞ。還るもあり行ぞとそ。さんちんあ〳〵ちん。と密語あり。且く時と後
〳〵たるが。やうやうに山中寂として。胆響もぜえどなりよりれば。ころあろ
ろろよりそろ〳〵立出て。長櫃のほとり伐ろれば。鮮血流れて。蒼竹の
葉を侵〳〵。い〳〵〳〵砂をとく仆れしる。死骸を楚と足指るほどぞ。
いろあと呆き果さるに。法ろ仏持ちれど。捨もあられぬ櫃の梓に。
動震とる肩をとゝ入れ。塞る足さく。踏ろあく。躍箭のごれ〳〵鹿



音の。山荘をさ〳〵立去ぬ。畢竟牛若丸。山荘に舞れ去
如何なる物語ある。そは次の巻に説ちをえくたらん。

俊寛僧都嶋物語巻之一終